

身体語彙を含むイディオムの日英比較

笠 川 紘 史

序 論

「腹が立つ」、「頭に来る」、「あいた口が塞がらない」、「手を貸す」などよく耳にしたり、口にしたりすることがあるだろう。これらのことを慣用句（イディオム）と言う。文字通りそのままの意味ではなく、別の意味を表すものである。慣用句はいろいろな言語にあるが、その意味や使われ方はその言語圏によって様々である。今回研究対象にする日本と、アメリカ、イギリスなどを含む英語圏の国々の慣用句の中には似たようなものもあれば、全く異なるものもある。それは、その国の社会、歴史、文化、思想によって見方が違うからである。今回はその慣用句の中でも身体語彙を使ったものを取り上げようと思う。身体語彙を使った慣用句はその身体部位の機能、役割などと関係していると思われるが、慣用表現が似ているものは少ないように思われる。また、似たような意味でも、使われている身体部位が日本語と英語で違っているものもある。本稿では、身体の機能や役割は人類共通なはずであるが、どうしてこれほど国によって異なっているのか具体的に示し、その違いは何によるのかについて考察していく。

第1章 慣用句（イディオム）の定義

“慣用句”という用語は一般的によく使われ、知られている。しかし、その意味・定義はというと、はっきり知られていない。そこでもう一度慣用句の定義をはっきりさせておく。主に日本で最も多く使われている広辞苑（第五版：1998）、大辞林（第三版：2006）の二つの辞書には以下のように書かれている。

① 慣用句：

二つ以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の元来の意味からは決まらないような慣用的表現。「骨を折る」「油を売る」「間髪を入れず」など。（広辞苑 1998：p618）

② 慣用句：

- (1) 二語以上が結合し、その全体が一つの意味を表すようになって固定したもの。「道草を食う」「耳にたこができる」の類。
- (2) 二語以上が、きまった結びつきしかない表現。「間髪を入れず」「悦に入る」の類。（大辞林 1998：p578）

このように、“慣用句”は二つ以上の語で成り立ち、その言葉どおりの意味ではないものであることがわかる。

第2章 イディオムに含まれる身体語彙の数

慣用句が日本語と英語でどのくらい似ているのか、または異なっているのか考察していきたい。そこでまず、それぞれの部位がどのくらい使われているのか調べたいと思う。調べる部位は、顔、頭、髪、額、目、眉、耳、鼻、口、唇、歯、舌、顎、頬、首、喉、胸、

肩、腕、手、指、爪、腹、臍、背、腰、尻、足、膝、脛の主要部位 30 種類を取り上げる。扱う資料として、日本で最も使われていて、23 万語余を収録している「広辞苑 第五版」を使用する。また英語に関しては 20000 表現を収録し、他の辞書には載っていないような表現も豊富にある「英和イディオム完全対訳辞典」を使用する。そして、今回の調査は人間の身体を対象にしたものなので、動物の身体は除くこととする。

調べたところ日本語 985 例、英語 1031 例あった。内訳は以下のとおりである。

表 1

日本語		英 語		日本語		英 語	
部位	数	部位	数	部位	数	部位	数
顔	36	face	69	胸	53	chest	3
頭	35	head	156			breast	3
髪	2	hair	30			bosom	1
額	7	forehead	0	肩	16	shoulder	12
目	176	eye	110	腕	18	arm	22
眉	9	eyebrow	3	手	132	hand	177
		brow	1			指	9
耳	45	ear	42	爪	10		
鼻	41	nose	42			nail	10
口	97	mouth	33	腹	67	fingernail	1
唇	7	lip	16			stomach	7
歯	16	tooth	30			belly	4
舌	22	tongue	40	tummy	1		
顎	10	jaw	3	臍	2	navel	0
		chin	4	背	8	back	40

頬	3	cheek	2	腰	30	waist	0
首	23	neck	24	尻(穴)	37	buttock	0
喉	5	throat	8			hip	1
		gullet	1	足	44	leg	26
						foot	58
						膝	19
				脛	6	shin	0

＜参照＞ 広辞苑 第五版（日本語）
英和イディオム完全対訳辞典（英語）

またこれらを順位別にすると以下ようになる⁽¹⁾。

表 2

順位	日本語	英語	順位	日本語	英語
1	目	hand	6	耳	finger
2	手	head	7	足	ear/nose
3	口	eye	8	鼻	nose/ear
4	腹	face	9	尻(穴)	tongue
5	胸	foot	10	頭	back

日本語、英語ともに 10 位に入っているのは顔、目、耳、鼻、手、足があった。また、口も英語では 10 位に入っていないものの 11 位であり、そして、頭も日本語では 10 位以内にはないが 11 位となっている。こうして見てみると、日英共通して頻度が多く使われている身体部位があることがわかる。そして、これらに多く共通して見られるものは感覚器官だということだ。目 (eye) は視覚、耳

(1) ear と nose は同順位のため、併記する。

(ear) は聴覚、鼻 (nose) は嗅覚、口 (mouth) は味覚、そして顔や頭はそれらを含んでいるし、また手の感覚は鋭敏であるし、足も手ほどではないが刺激に反応しやすい部位である。このように、外からの刺激に対して反応しやすいところ、あるいは物事を感じ捉えるところを使って、言葉にしている傾向が強いことがわかる。

宮地裕 (1982 : p247) においても慣用句と感覚器官のつながりについて指摘している。以下、その一部を引用する。

一般に外界との関係の度合いが高い部分には人間の感情がよく現れる。目、口、鼻、耳は、髪、頬、眉より外界からの刺激に対して反応しやすい。目、顔、口、首、手、頭、鼻、耳、などで構成された慣用句は、髭、指、爪、腕、膝、尻、腰、毛などに関する慣用句より、比較にならないほど多いのである。また、身体の内部と外部にも相違がある。身体の内部は、身体の外部と同じように、人間にとって欠くべからざるものだが、外界と直接接触する機会が非常に少ない。そのうえ、目に見えない身体の内部は分かりにくい存在であり、さらに、通常の身体行動とは関係が少ない。そのために、目に見えるもののほうを重視するのだろう。胃、腸、胴、腎臓、肝臓、肺などの身体語彙はめったに慣用句に使われない。

宮地 (1982) には日本語の慣用句に関してのことしか書かれていないが、英語にも同じようなことが言える。表 1, 2 でもわかるように英語にも目、顔、口、首、手、頭、鼻、耳は多い。そして、髭、爪、腕、膝、尻、腰、毛は少ない (指は別として)。また、胃、腸などの内臓の語彙はあまり見られないのである。この点に関しては日本語だけでなく英語にも同じことが言えよう。

第3章 慣用句に使われる身体部位の日英それぞれの捉え方

日本語と英語では身体語彙を含む慣用句の数と感覚器官との関係では共通点が見られた。そして、慣用句に使われている身体語彙の数が日英ともに多かったは、目、口、鼻、耳、頭、顔、手、足であった。ここではこれらの中で「目」を取り上げて、そこが日本、英語圏の国でどのように捉えられているのか調べる。また、日本語と英語で数に大きく違いが見られた、「腰」、「腹」、「頭」について、なぜこのような違いが見られるのか考察する。身体語彙を使った慣用句は比較的、感情、心理状態を表すものが多く見受けられる。よって、ここでは大きく「感情や心理状態を表したもの」と「感情や心理以外を表したもの」の二つに分けて調べていく。

3. 1 目 (eye)

「目」は日本語 176 例と一番目に多く、英語は 110 例と三番目に多く、日英ともにとっても多かった。ここでは、「目」が慣用句の中でどのような捉えられ方がされているのか、さらにそれが日本語、英語で似ているところがあるのか、または異なっているところがあるのか見ていく。そのために以下では、「目」がどのように捉えられているのか網羅的に分類していく。

3. 1. 1 感情や心理状態を表したもの

捉え方	日本語	英語
①喜び	好い目を見る、目の正月、目の保養、目尻を下げる、目を細くする	feast one's eyes on something
②驚き	目が出る、目が点になる、目	can't believe one's eyes, one's

	が飛び出る、目口はだかる、目を見張る、目を丸くする、目の色を変える、目を疑う、目を白黒させる	eyes pop out, one's eyes start out of one's head, (all) my eye (and Betty Martin)!
③怒り	目が据わる、目を剥く、目に角を立てる、目に物見せる、目くじらを立てる、目の色を変える、目を三角にする	scratch someone's eyes out
④感動	目頭が熱くなる、目頭を押さえる、目を潤ませる、目を奪われる	easy on the eyes, (There is) not a dry eye in the house
⑤好意	御目が参る、御目が行く、御目に入る、目が無い	get the glad eye, give someone the glad eye, make eyes at someone, (just) keep one's eyes off something
⑥冷淡	白い眼で見る、側目にかく	get the (evil) eye, give someone the (evil) eye
⑦黙認	目をつぶる	shut [close] one's eyes to something
⑧悲哀	泣き目を見る	cry one's eyes out
⑨失望	目の前が暗くなる	one in the eye for someone
⑩軽蔑	尻目に懸ける	spit in someone's eye
⑪不満	目に余る	—————
⑫多忙	目が回る、目張りを回す、目を回す	—————
⑬敵対	目の敵にする	—————

感情、心理を表すものは日英ともにとっても幅広く、様々な気持ちを「目」ひとつで言い表すことができる。これ程多いのは、「目」が物や、出来事を認識する第一の手段だからではないかと思う。例

例えば、人はまず「目」で見て、その物や、出来事に驚いたり、喜んだり、怒ったり、感動したりする。だからこれだけ感情や心理を表す慣用句が多くなったのではないかと思う。また、「目」は「目」一つで様々な表情を表せるところだからではないかと思う。「目」を見るだけでその人が怒っているのか、または喜んでいるのかがわかる。例えば、作り笑いをしている人に向かって「目が笑ってないよ」と言うことがあるだろう。このように「目」は睨んだり、ウィンクしたりなど意識して感情を外に表す他に、意識もせず自然とその人の感情、心理状態が表れるところなのである。「目は口ほどに物を言う」や「目が物語る」と言うように、「目」はさまざまな表情が出せる場所なのである。これらは別に文化間によって捉え方に違いがあるものではない。だから感情、心理状態を表す慣用句は日本語、英語共通しているところが多くなっているのである。

3. 1. 2 感情、心理以外の目の捉え方

捉え方	日本語	英語
①関心・注目	長い目で見る、目が眩む、目が散る、目が無い、目が行く、目に懸ける、目に留まる、目の鞘を外す、目もくれない、目もすまに、目を入れる、目を据える、目を澄ます、目を注ぐ、目をつける、目を止める、目をやる、目を引く、目を掛ける、目を奪う、目もくれない、目を凝らす	be all eyes, easy on the eye, have an [one's] eye on something, have one's eye(s) on something, have eyes only for someone, have one's eyes peeled [skinned], give someone [something] the eye, keep one's eye(s) on something, keep one's eyes peeled [skinned], open (up) someone's eyes (to something), (can't) take one's eyes off

		someone
②視線	人目に余る、(人) 目に立つ、人目にさらす、(人) 目に付く、人目を奪う、(人) 目を忍ぶ、(人) 目を盗む、人目を憚る、人目を引く、二目と見られない、目が合う、目棲を忍ぶ、目にする、目に触れる、目も当てられない、目も及ばず、目を覆う、目を落す、目を掠める、目を離す、目を伏せる、目を晦ます、目を向ける、目を遣る	cast [run/pass] an eye [one's eye(s)] over something [someone], catch someone's eye, in the public eye, (not) know where [which way] to turn one's eyes, look someone (straight/right) in the eye, meet someone's eye(s)
③注意	目が届く、目が離せない、目が早い、目が光る、目を配る、目を光らす	have an eye out [open], have eyes in [at] the back of one's head, have one eye on something, keep a close [careful/sharp/watchful] eye on something, keep a [one's] weather eye on something, keep a [one's] weather eye out [open], keep an [one's] eye on something, keep an eye [one's eye(s)] out [open], mind one's eye (with something), have one eye on something
④能力 (判断力・分別力)、 理性	目が利く、目が肥える、目が高い、目が無い、目から鼻へ抜ける、目に一丁字なし、目端が利く、目を肥やす、欲に	get one's eye in, have an eye for something, a weather eye

	目が眩む	
⑤騙す	目を抜く	do someone in the eye
⑥自覚、理解、認識	目が覚める、目から鱗が落ちる、目を開く	—————
⑦生死	目の黒いうち、目をつぶる	
⑧不貞	—————	have a roving eye, have an eye for the ladies
⑨計画、目標	—————	have an eye to something, with an eye to something [doing]
⑩その他	39 種類	22 種類

感情、心理以外の捉え方は日英ともに多種多様であった。しかし、その中でも能力（洞察力、判断力、観察力）、関心・注目、注意、視線など、「目」の意味・役割・働きを現すものに偏っていて、これは日本語、英語ともに共通して見られた。その他は、たくさんの捉えられ方があったが、どれも数例に過ぎなかった。

「目」を含む慣用句を見てみると、「目」は日英両方とも非常に様々な使われ方がされていて共通点が多いことがわかった。ただし、「感情、心理状態を表すもの」、「それ以外を表すもの」共に、どちらも日本語の方が種類は多く、英語より日本語の方が表現豊かなことがわかった。

3. 2 腰 (waist)・腹 (stomach, belly, tummy)

腰・腹は上半身と下半身の中間にあり、人間のからだを支える非常に重要な場所である。だからそれだけ日本語・英語ともに慣用句の数も多いのかと思われるが、腰と腹の使われ方は日本語と英語で

は極端に違っているのである。日本語は腰が30例、腹は67例もあるのに対して、英語は腰（waist=0例）、腹（stomach=7例、belly=4例、tummy=1例）と非常に少ないことがわかる。どうして日本語は英語に比べて、「腰・腹」の表現が多いのだろうか。日本の「腰・腹」の捉え方には特別なものがあるのか。ここでは、この点について考察していく。

腰・腹はその位置的にからだの中心を成している。「腰」という漢字をみると「月」に「要」と書くことからわかるように日本人は腰をからだの中心を成す、大切なところだと考えていた。また「腹」には内臓があり、生命維持には欠かせないものがあるところで非常に大切な場所である。日本人の身体文化について論じている斉藤孝（2000）も次のように言っている。

腰や腹を強調していた時代には、身体の中心感覚（自分の中にしっかりとした中心を感じること、「芯が通っている」「芯が強い」など）を常に意識することをもとめられていた。子供の頃から腰が入っていなければ馬鹿にされるという慣習があり、しっかりとした中心感覚を作り上げることが明確な課題となっていた。（斉藤 2000：p5）

腰と腹が決まっていれば背筋はその上に正しく据えられることになり背筋は自然と伸びる。腰の構えが崩れているときに無理に背骨を垂直にしようとしても湾曲してしまう。背骨が中心軸の感覚の基本であるとすれば、中心軸の感覚は腰の構えのつくり方に大きくかかっている。（同上：p5, 6）

日本の身体文化は、他の身体文化に比べて、とりわけ腰と腹を

重要視するものであった。うどんなどの麺類にたいしてさえも、「腰がある」「腰が強い」という表現を用いる。最も重要な強さを腰という言葉で表現するのである。(同上：p144)

日本の武道・芸道は、腰腹の重要性を強調する点で共通している。したがって、茶道にせよ能にせよ弓道や剣道にせよ、一つの武道・芸道のからだの基礎は、他のものにもおよそ応用可能である。何をにしても基本となるからだの構えというものがある。腰の構えが決まっています、腹に余裕がある構えが基本である。(同上：p144)

このように日本は非常に腰・腹を大切にしてきた伝統がある。要は、「意識」が「腰・腹」にあったのである。これは、腰・腹がしっかりし、背筋が一本通っていて、そしてその内面には揺るがないしっかりとした心をもっていることである。このように日本人は「心」と「からだ」は切り離すことのできないものと考えていたのである。一方、それがアメリカ、イギリスなどの英語圏の国では「意識」は「頭（脳）」ですることだと考えられてきた。それが日本人にとっては「腰・腹」だったのである。このことから、日本語には「腰」、「腹」の慣用句が多く（英語には少なく）、英語には「頭」の慣用句が多い（日本語は少ない）のは、これに繋がっているのかもしれない。

「意識」が「腰・腹」にあると言っても、今の日本人にとってはびんと来ない人も多いだろう。なぜなら、今となっては日本から忘れられかけているものだからである。よく道端で座り込んでいる人だったり、授業を受けていてもただらだらしてちゃんと座ってられない人をよく見るだろう。これは「腰・腹」に「意識」が行っ

ていないからである。一昔前にはこのような光景はなく、何をすることにしても腰・腹がしっかりしていて背筋がピンとしていた。そしてこういう人達にしっかりとした心があると思われてきた。なぜこのように変わってきてしまったのか。大きく腰・腹の文化が崩れ始めたのは戦後だと言われている。戦争で負けた後、日本はものすごいスピードで復興し高度経済成長の波にも乗り発展してきた。その間に、日本は外国、特にアメリカに憧れをもち、または目標としてアメリカから様々な影響を受けいろいろなものを日本に取り入れてきた。その結果、日本はとても豊かになったのだが、反面、さまざまな日本古来の伝統、文化が壊れてきたと思う。その中の一つが「腰・腹」の文化であり、「意識」が「腰・腹」から外国の「頭（脳）」に変わってきたのだと思われる。

今となっては失われつつある腰・腹文化なのだが、慣用句の世界ではその文化がしっかりと反映されている。先程、からだ（腰・腹）と心は一体なものと考えられてきたと言ったように、実際に腰と腹の慣用句を見てみると、感情、心理状態を表すものが非常に多いことがわかった。以下、普段聞き慣れている腰・腹に関する慣用表現の例をいくつか挙げてみる。

腰：

番号	慣用句	意味
①	腰が重い	無精で、気軽に行動に移さない。
②	腰が砕ける	物事に立ち向かう勢いが途中でなくなる。 意気込みが衰える。
③	腰が高い	他人に対して態度が尊大・横柄である。
④	腰が強い	たやすく人に屈しない。気が強い。
⑤	腰が抜ける	驚いて立ち上がる力がなくなる、また、激

		しい打撃を受けて気力がなくなる。
⑥	腰が低い	他人に対して態度が謙虚である。
⑦	腰を入れる	本気になる。覚悟をきめてやる。

この他にもまだいくつかあり、腰に関する慣用句 30 例中 18 例あった。

腹：

番号	慣用句	意味
①	腹が癒える	怒りや恨みを晴らして、気持ちが治まる。
②	腹が立つ	しゃくにさわる。立腹する。
③	腹が煮える	強く憤っている気持ちのたとえ。腹が煮えくり返る。
④	腹が振（よじ）れる	あまりのおかしさに大笑いするさま。
⑤	腹に据えかねる	あまりにもひどいと、怒りをこらえることができない。我慢できない。
⑥	腹を固める	覚悟する。決心する。
⑦	腹を探る	人の心中をそれとなしにうかがう。
⑧	腹を見抜く	相手の隠している考えや企みを知る。
⑨	腹を割る	包み隠さず真意を明かす。

以上 9 例を含め腹に関する慣用句 67 例中 44 例もあった。

このように「腰」、「腹」の慣用表現に感情・心理を表すものが多いことを考えると、「腰・腹に意識がある=心がしっかりしている」とし、腰・腹を心と一体としてきた腰・腹文化に大きく影響されているのがわかる。

3. 3 頭 (head)

頭は日本語では 35 例、英語では 156 例と、調べた 30 種類の身体部位の中で一番数の差が大きかった。なぜこんなに数が違っているのか。3. 2 節で「意識」の場所について論じ、日本では「腰・腹」にあり、英語圏では「頭」にあることがわかった。この違いが「腰」、「腹」の慣用句で日本語と英語で大きく差がでたように、「頭」でもこのことが大きく関係しているのではないかと思う。以下、この点について考察していく。

「頭」とは首から上の部分を指し、主に「脳」を指している。脳は脊髄と共に中枢神経を成していて様々な情報を伝達・処理しており、脳は感情・思考・生命維持の役割を担っているところである。だから、思考、能力や感情、心理を意味するものが多数あった。特に思考・能力に関しては数に違いはあったが、日本語、英語ともにそれほど捉え方に違いはなかった。

日本語：

番号	慣用句	意味
①	頭が固い	柔軟な考え方ができない。融通がきかない。
②	頭が切れる	頭の回転が早く、てきぱきと事を処理する能力がある。
③	頭が古い	考え方が古く、今の時代に合わない。
④	頭に入れる	ある事柄をしっかりと記憶しておく。
⑤	頭に浮かぶ	眼前にない事柄が、頭の中に思い描かれる。また、ある考えを思いつく。
⑥	頭の中が白くなる	頭の中に何も浮かばなくなる。何も考えられなくなる。
⑦	頭を絞る	苦心して色々考える。知恵を絞る。
⑧	頭をひねる	どうしたらよいか、色々考える。

⑨	腹を割る	包み隠さず真意を明かす。
---	------	--------------

英語：

番号	慣用句	意味
①	come [pop] into someone's head	(考え、望み、計画などが) ~の頭に浮かぶ
②	have a clear head	明晰な思考能力がある、頭脳明晰だ
③	have a (good) head for something	~に優れている、~の才覚がある
④	have one's head screwed on right	ものの道理が分かっている、ばかではない
⑤	keep [have] a level head	分別がある、正しい判断力を失わない
⑥	soft [weak] in the head	おつむが弱い、ちょっと足りない、頭が鈍い
⑦	use one's head	頭を使う、知恵を絞る、よく考える

しかし、反対に感情・心理は大きく違いがでた。

捉え方	日本語	英語
①悩み	頭が痛い、頭を抱える、頭を悩ます	bother [trouble/worry] one's head, scratch one's head
②怒り	頭に来る、頭に血がのぼる	bite [take/snap] someone's head off
③冷静	頭を冷やす	keep a cool head, keep one's head
④謙虚	頭が低い	—————
⑤服従	頭が上がらない	—————

⑥恐怖	頭から水を浴びたよう	_____
⑦感心	頭が下がる	_____
⑧爽快	_____	clear one's head
⑨横柄	_____	fling one's head back
⑩慢心	_____	get [have] a swelled [swollen/big] head, give someone a swelled [swollen/big] head, turn someone's head
⑪恥	_____	hang one's head (in shame), (can't) hold one's head up
⑫好意	_____	head over heels for someone, head over heels in love, throw [fling] oneself at someone's head
⑬自信	_____	hold one's head high, with one's head held high
⑭混乱	_____	not know if [whether] one is on one's head or one's heels
⑮狂	_____	need (to have) one's head examined, off one's, out of one's head, (not) (quite) right in the head, be touched in the head
⑯賛成、 反対	_____	nod one's head, shake one's head
⑰覚悟	_____	put [lay] one's head on the block

頭の慣用句で感情・心理状態を表すものは、日本語よりも英語のほうが種類も多く、数も多い。これは、先ほど3. 2節「腰・腹」

で上述したことと関連して、「意識」の場所が大きく影響している。日本は「意識」が「腰・腹」にあって、それは「心」と一体となっていた。だから「腰」、「腹」を含む日本の慣用句では感情・心理状態を意味するものが非常に多かった。そして英語圏の国にはそのような文化がなかったから、「腰」、「腹」の慣用句自体が少なかった。しかし、それが「頭 (head)」ではまったく反対になっている。英語圏の国では「意識」が「頭」にあるのである。だから、それだけ「腰・腹」に慣用句が無い分だけ「頭 (head)」に多くなっているのである。

以上の点から、日本語の「腰」、「腹」の慣用表現が英語では「頭 (head)」を使って表現されている可能性はないだろうか。対応しているものを以下に挙げる。

① 横柄：

腰が高い（他人に対して態度が尊大、横柄である。）、高腰を掛く（尊大な態度をとる。）

≒ fling one's head back 「(昂然と、横柄に) 頭をそらす。顔をのけぞらせる。」

② 覚悟、決心：

腰を入れる（本気になる。覚悟をきめてやる。）、本腰を入れる（真剣になって物事をする。）

腹が据わる（心が決まっていて、物事に動じない。覚悟する。）、腹を決める（決意する。）、腹を固める（覚悟する。決心する。）

≒ put [lay] one's head on the block（危険、困難を承知でやる。失敗を覚悟の上でやる。）、take it into one's head to do（～しようと思いつく、思い込む。）

対応しているものはもっと多いかと思ったが、以上の2種類だけだった。しかし、数こそ少ないものの、内容的には、「意識」が日本では「腰・腹」にあり、英語圏では「頭」にあることがはっきり示されていることがわかる。

以上見てきたように、「頭 (head)」の慣用句も「腰」、「腹」のそれと同様、「心」の在り方に大きく左右されていることがわかった。これらからわかるように、日本は「腰・腹」、英語圏の国は「頭」と国によって違いはあるが、それだけ、人は昔から「からだ」と「心」を一体のものと考えてきたことがわかる。

結 論

日本語、英語の慣用句 (イディオム) に含まれる身体語彙の数、そしてその中で「目 (eye)」、「腰 (waist)」、「腹 (stomach, belly, tummy)」、「頭 (head)」を取り上げて、日英の比較をしてきた。今回の考察では、似ている点として、日英ともに感覚器官である身体部位を使った慣用句が非常に多く使われていることがわかった。また日英で大きく異なった点では、それぞれの国の身体文化が大きく影響していたことがわかった。

「目」は日英ともに数が多かったものの代表として取り上げた。この「目」では多少の違いはあったものの、日英ともに捉え方は非常に似ていた。考えてみれば、人間は国は違えど、からだの作りは人類共通であるし、そのそれぞれの身体部位の役割は同じなのである。だから、身体部位の捉え方がそんなに大きく異なるはずはないのである。

また、日英慣用句の数に大きく差が出たものとして「腰」、「腹」、「頭」を調べた。ここではそれぞれ国の「意識」の場所 (身体文化)

が関係してきた。日本人の「意識」の場所は「腰・腹」（腰・腹文化）であり、それが「腰」「腹」の慣用句にも大きく影響されていた。そして英語圏の人達の「意識」は「頭」にあり、「頭」の慣用句がとて多かった。「意識」は「心」と一体と考えられているので、日本の「腰」「腹」、英語の「頭 (head)」の慣用句には感情・心理状態を表すものが多かった。

今回、英語圏の国がどこの身体部位を大事にしてきたかは、明らかにできなかったが、日本同様、英語圏の国にも身体文化があるはずである。これは日本、英語圏の国に限らず、どこの国にもその国独自の身体文化があるはずである。そして、日本語には腰・腹の慣用句が多かったのと同様、外国語にもその国独自の身体文化に影響された慣用句があるはずである。そして、それぞれの国の身体文化が伝播し、相互に影響しあって、それぞれの国の慣用句にも大きく関わっているのかもしれない。

余談ではあるが、今回のこの研究で初めて、自分の国である日本の「腰・腹の文化」のことを知った。参考文献などを読めば、「あー、確かに日本はこういう国だよな」と納得するのだが、これほどまで「腰・腹」を大切にしていたとは知らなかった。現代の日本ではさまざまな伝統・文化がとて失われている。その一つがこの文化である。この考察を通じて新しい自国の文化を知ることができたのは本当に良かったことだと思うし、これを含めた日本の伝統・文化の良さを再認識し、大切にしていきたいと思った。

参考文献

宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院

斉藤孝（2000）『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』日本放送出版協会

林八龍（2002）『日・韓・量国語の慣用的表現の対象研究 — 身体語彙慣用句を中心として —』明治書院

参考辞書

『広辞苑』第五版（1998）岩波書店

『大辞林』第三版（2006）三省堂

『英和イディオム完全対訳辞典』ジャン・マケーレブ、岩垣守彦（2003）朝日出版社